

製品群No. 58

製品群No. 58

[illegible]

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワグシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 観察背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効果・効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効果効果
評価の要点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に 特異体質・ア レルギ等 によるもの	重篤ではないが、注意すべき 副作用のおそれ 薬理・毒性に 特異体質・ア レルギ等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	重症投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるおそ それ	使用量に上 限があるもの 使用のおそれ	スイッチ化 に伴う反 用環境の悪 化		効果効果
抗 白 蟻 菌 成 分	医療用医薬 品としてなし										
デオコナゾ ール	ハイアレー ジン軟膏・液										
トルナフター ト	各種真菌類 に対するトル ナフタートの 抗菌力 対象菌 MIC (μg/mL) Trichophyton rubrum 0.0125 T. interdigitale 0.025 T. asteroides 0.025 Microsporum canisum 0.0125 Microsporum lapponicum 0.005 Epidermophy ton inquilinale 0.005 Candida albicans > 500 Cryptococcus neoformans >500 Aspergillus fumigatus > 500 Aspergillus niger 0.0125			頻度不明 (過敏症状)	0.1%未満 (局所刺激、 発赤、皮膚 炎等)	広範囲の病巣に 使用する場合	・患部が化膿 しているなど は著しい場 合にはあら かじめ適切な 処置を行うこ とが望まし い。	・眼科用に使用 しない。	通常、1日2～3回、適量を 患部に塗布又は塗擦す る。	汗疱状白癬、 疥癬、小水疱、 接触性白癬、 癬菌	

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワケゲントNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 副作用のおそれ	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(使用法のおそれ)	H スイッチ 化に伴う 使用環境の 変化	効果効果
		相互作用	併用注意							
評価の観点	薬理作用	相互作用	併用注意	重篤な副作用のおそれ	特異体質・アレルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	重篤な副作用のおそれ	使用法(使用法のおそれ)	スイッチ化 に伴う使用環境 の変化	用法用量
高所投与成分	注意、求心作用、 経絡線のNa ⁺ チャネルを遮断することにより局所麻酔作用を奏する。効力、持続性、毒性いずれも最大値の局所麻酔薬であるが、より効力を強めるために局所麻酔薬以外の目的にはエドニプリンを添加して用いる。			振蕩、悪寒等の中毒症状(強度不明)	ショック(強度不明)	頻度不明(嘔気、不安、興奮、露視、眩暈、悪心、嘔吐等)	頻度不明(嘔気、不安、興奮、露視、眩暈、悪心、嘔吐等)	頻度不明(嘔気、不安、興奮、露視、眩暈、悪心、嘔吐等)		使用に際し、目的薬の水性注射液または水性液として使用する。 ただし、年齢、経路、投与量、部位、組織、症状、体質により適量増減する。 仙骨麻酔 0.05～0.1%注射液にエドニプリンを添加したものを用い、通常成人10～30mgを使用して。 伝導麻酔 (通常最高用量:1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエドニプリンを添加したものを用い、通常成人3～40mgを使用して。 浸透麻酔 (通常最高用量:1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエドニプリンを添加したものを用い、通常成人1～40mgを使用して。 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜麻酔には、1～2%液にエドニプリンを添加したものを用い、噴霧または塗布する。 ・眼科領域の麻酔には、0.05～0.1%液にエドニプリンを添加したものを用い、通常成人には1～5滴を点眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、0.1%液にエドニプリンを添加したものを用い、通常成人として、通常成人男子10～20mg、女子3～7mgを使用する。 ・膀胱粘膜麻酔には、0.025～0.05%液にエドニプリンを添加したものを用い、通常成人10～20mgを使用する。 ・局所麻酔には、0.025～0.05%液を用い、適量を使用する。 眼科領域麻酔 0.1%注射液にエドニプリンを添加したものを用い、伝導麻酔・浸透麻酔には、通常成人1～2mgを使用する。

ワークシートNo.38

[illegible]

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	D 適用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(服用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	機能効果
評価の観点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	慎重投与 (投与により障害の 重篤化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ する症状を 誘発するおそれ	使用方法(服用のおそれ) 使用量に上 限があるもの	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が生ずる おそれ)	薬理・毒性に 基づくもの	薬理・毒性に 基づくもの によるもの	過敏症 (皮膚発疹及び結 核(感染性)等)	過敏症(皮膚 発疹等)	・薬液または薬 膏が皮膚に付 着した場合には 洗剤で洗い落と す。中重症状を 起こすことがある ・咽に入らないよ うに注意するこ と。 ・本剤は必ず希 釈し、患部に注 意して使用する こと。 ・水痘または異 刺刺激性の顔面に 使用する場合には 、患部に注意し て正常の部位に に使用するより も低濃度とする ことが望ましい。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包装、デブ ス包、パブリに 使用する時は、患 部を乾燥させ、 中重症状が あらわれるおそ れがあるため、 使用しないこと。 ・薬液または パブリに使用し ないこと。「服用 され、中重症状 を認めるおそれ がある」 ・患部を避けるた め、衣類及び取 扱いには十分注 意すること。		効能・効果 用法・用量(本 品含有量) ・手洗・皮膚の消毒:フェ ノールとして(1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手拭・紙 ・室・家具・器具・物品など の消毒:フェノールとして2 ~5%溶液を用いる。(20 ~50倍) ・精油物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) ・下痢・嘔吐の消毒 ・糞便(小児ストロフルスを 含む)、じん疹疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) ・消毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍)

ワークシートNo.38

消炭院公

[illegible]

皮膚軟化薬(吸出しを含む)

製品群No. 59

ワークシートNo.39

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 差用のおそれ	E 患者群(既往歴、治療法等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効果・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	効果効果
評価の観点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	差用に基づく 留意性	慎重投与 (投与により副作用の 発生、悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるおそれ	使用方法(使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	効果効果
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が生ずる おそれ)	薬理・毒性に 特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 留意性	慎重投与 (投与により副作用の 発生、悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるおそれ	使用方法(使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	効果効果
鎮痛成分	モノカイン 液「4%」:塩 酸リドカイン 系局所麻酔薬に 類似のため 使用	神経麻酔のナト リウムチャネル 阻害作用により、神経にお ける活動電位 の伝導を可 逆的に抑制し、知覚神経 及び運動神経を遮断する 局所麻酔薬である。表 面・透皮・伝 導麻酔効果は、塩酸プロ カインよりも強く、作用機 構は時間的 緩慢プロカイン よりも低い。	意識障害、 振戦、痙攣 (頻度不明)	ショック(頻度 不明) アレルギー (頻度不明)	頻度不明(過 敏症) アレルギー (頻度不明)	高断薬又は全身状 態が不良。心臓の 伝導麻酔。重症の 肝機能障害又は腎 機能障害、幼児、 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人。	症状の悪化 につながるおそれ	使用方法(使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	効果効果
抗炎症成分	グリチルリチ ン酸二カリン	点眼のみ								
抗炎症成分	グリチルリチ ン酸モノア ニウム	外用はなし								
抗炎症成分	グリチルリチ ン酸	デスマクリン 軟膏	グリチルリチ ン酸は急性 炎症に対する 抗炎症作用 (環状リボ ン酸阻害 作用)を有す る。抗炎症 作用は主成分 であるグリ チルリチン酸 の化学構造 がイソイソ コラーゼの 阻害作用に 類似している ところによる と推定され る。	5%以上又は 頻度不明(過 敏症)				眼科用として使 用しない		通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布または 塗擦する。

ワークシートNo.39

皮膚軟化薬(吸出しを含む)

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	D 適用のおそれ	E 患者背景(既往症、治療法等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	機能効果
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	薬理に基づく 器質性	適応禁忌	検査技手 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	通成対象の判別 に注意を要す する(適成を 疑うおそれ)	使用法用量
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	薬理に基づき 留意すべきもの	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	検査技手 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	使用法用量	機能効果
ヒタマシロコフエ ロール(ニタミ ンE)	低小循環系 の駆逐作用 を有し、薬剤 血行促進作用 を有し、血管 管壁の透過 性を改善す る。抗酸化作用 を有し、過酸 化脂質の生 成を抑制す る。内分泌系 の駆逐作用を 有し、内分必 系の失調を是 正する。	併用禁忌(他 剤との併用に より重篤な同 題が発生する おそれ)	薬理・毒性に 特異的性質・ア レルギ等 によるもの	薬理に基づく 器質性	適応禁忌	検査技手 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	使用法用量	機能効果
タミミン成分	低小循環系 の駆逐作用 を有し、薬剤 血行促進作用 を有し、血管 管壁の透過 性を改善す る。抗酸化作用 を有し、過酸 化脂質の生 成を抑制す る。内分泌系 の駆逐作用を 有し、内分必 系の失調を是 正する。	併用禁忌(他 剤との併用に より重篤な同 題が発生する おそれ)	薬理・毒性に 特異的性質・ア レルギ等 によるもの	薬理に基づく 器質性	適応禁忌	検査技手 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	使用法用量	機能効果
サリチル酸 「エビス」	解熱・鎮痛作 用を有し、腸 胃刺激作用を 有し、胃酸分泌 を促進する。抗 炎症作用を有 し、腫瘍細胞の 増殖を抑制す る。抗酸化作用 を有し、過酸 化脂質の生 成を抑制す る。内分泌系 の駆逐作用を 有し、内分必 系の失調を是 正する。	併用禁忌(他 剤との併用に より重篤な同 題が発生する おそれ)	薬理・毒性に 特異的性質・ア レルギ等 によるもの	薬理に基づく 器質性	適応禁忌	検査技手 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	使用法用量	機能効果

※うおのめ・たこ・いほ用薬

毛髪用薬(発毛、養毛、ふけ、かゆみ止め用薬等)

製品群No. 60

ワグシートNo.40

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		D 薬用のお それ	E 最者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながらざるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながらざるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	機能効果	
			重篤な副作用のおそれ	重篤でないが、注意 すべき副作用のおそれ							
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤でないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 蓄積性	慎重投与 (投与により副作用の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながらざる おそれ	使用量に上 限があるもの	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	
発毛促進成分	塩化カルプロ ニウム液は、 本剤の局所 血管拡張作 用を円形脱 毛症をはじめ 各種脱毛症 における脱毛 防止、発毛促 進および乾性 細胞炎、尋常性 白斑の治療に 応用した局 所用薬剤で ある。また、 発毛促進作 用を有し、微 能低下状態 にある毛根に 作用して、発 毛を促進す る。	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	アレルギー・ア レルギー等 によるもの	アレルギー・ア レルギー等 によるもの		本剤の成分または 他の薬物に対し 過敏症の既往歴 ・高齢者		・塗り薬剤に全 身療法、それに 伴う悪寒、眩暈、 嘔気、嘔吐等が あらわれることが ある。 ・投与時、本剤は 眼に入るとしみ るので眼に入れ ないよう注意 すること。 ・投与部位：外用 にのみ使用する こと。 ・湯あがりのあと 等に使用すると 副作用が強くな らわれる傾向が ある。		①②1日2～3回適量を患 部に塗布、あるいは患部 部全体にふりかけ軽くマッ サージする。 ③1日3～4回適量を患部 に塗布する。 ・高齢者は減量するなど注 意すること。	①下記のこと き使用におけ る脱毛防止な らびに発毛促 進 ・円形脱毛症 ・多発性円形 脱毛症(多発性円形 脱毛症を含む) 悪性脱毛症、 びび脱毛症、 症、斑禿性脱 毛症、壯年性 脱毛症、亜慢 性脱毛症など ②乾性細胞 ③尋常性白
	ミノキシジル	外用はなし									
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェ ニド ヒドラミン	外用はなし ・アレルギー									

2/10